

「高度な知の創成と的確な知の継承」一。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

数分での決断

大藤医師らによる脳死下肺移植手術



2014年7月3日。特発性間質性肺炎を患う60代男性への脳死肺移植手術を控えていた大藤医師は、難題を突き付けられていた。早朝、移植チームのスタッフから「摘出した脳死ドナーの肺が肺水腫を起こした」との連絡を受けたからだ。手術か、断念か。頭の中で、あらゆるケースを想定する。肺の状態を考えると、「答え」を出すまでに与えられた時間はわずか数分だ。悩み抜いた上に出した結論は、肺の左右を反転させることだった。未知の手術への挑戦が必要となったが、「患者の状態から見てラストチャンスだった」と大藤医師。約7時間にも及んだ手術は、脳死下では国内初の成功となった。

最後の希望は肺移植 確かな知識と経験で、患者を救う



岡山大学病院は心臓、肝臓、肺臓、腎臓、小腸はじめ多臓器の臓器移植が行える数少ない認定施設。その中でも、肺移植は日本でトップの実力を誇る。肺移植チーフを務める医歯薬学総合研究科の大藤剛宏准教授を訪ねた。



岡山大学病院

希望を運ぶ仕事

肺移植の権威として知られる大藤医師のもとには、全国各地の肺移植を望む患者から依頼がくる。その一人一人を自ら往診。データだけでは分からない細かい状態を確認することはもちろん、顔を見合わせながら話をすることで、信頼関係を築くためだ。「この人なら命を預けることができる」と思ってもらえるようにならなくては」と、どんなに忙しくてもポリシーは曲げない。「起き上がれるようになったら、移植をしましょう」。寝たきりで手術が困難な患者には、こんな言葉を掛けてみる。治療だけでなく、闘病生活を送る患者が、生きる希望を感じられる提案をするのも、医師の使命と考えている。

遠回りこそ近道

最初から肺移植を専門としていたわけではない。香川、広島県の関連病院では、消化器、循環器、呼吸器科など、さまざま

な現場を経験した。2002年から5年間留学したオーストラリアの病院では、提供臓器の評価から手術、術後管理まで、一貫した技術を習得。約200例にも上る肺移植に携わった。

その中で学んだのは、「外科医だけでは、患者を元気にすることはできない」ということだ。肺移植を成功させるためには、集中治療、免疫療法など、多様な分野を知っていなければならぬ。遠回りをして得た知識が、患者を救う大きな武器になっている。

命を救う

「世界初」「国内初」の肺移植を次々と成功させてきた大藤医師。新聞社などの取材を受ける際、記者から「どうして新しい移植方法を思いつくのか」と、質問されることがよくある。だが、大藤医師は言う。「患者の中には、従来の移植法では助からない人もいます。私はただ、目の前にいる患者を救う方法を模索しているだけです」。

医師としての喜びを感じる瞬間がある。「寝たきりだった患者が、自分の足で元気に帰っていき姿を見送る時」だ。これからも、その手で多くの命を救うべく、大藤医師の挑戦は続く。

- OTO TAKAHIRO (47歳)**
- ▶1967年 広島県竹原市生まれ
 - ▶1992年 岡山大学医学部卒業
 - ▶1995年 香川県立中央病院外科 勤務
 - ▶1995年 土肥病院心臓血管外科 勤務
 - ▶1998年 岡山大学第二外科 勤務
 - ▶1999年 岡山大学肺移植研究員
 - ▶2002年 オーストラリアMonash大学Alfred病院 勤務
 - ▶2007年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 准教授

大藤 剛宏

大学院医歯薬学総合研究科(医) 准教授